チャイコフスキー・コンクール優勝のニュースは、彼女の留学先のここチューリヒでも反響を呼んだ。チューリヒ音楽大学内での受賞コンサートの他、一般のコンサートでも聴く機会があったが、レコーディングとなると別である。その模様を是非皆さんにお伝えしたい。

海外取材

神尾真由子、3月にチューリヒで初レコーディング。6月にデビュー盤をリリース！

取材・文＝中 東生
Text=Shinobu Naka

録音初日は、会場のピアノの調律や、ピアニストの希望と異なるピアノの硬質な音を調整するのに長い時間を要したという。また、録音会場自体も、室内オーケストラの本拠地だったので、小さなホールで響きも硬く心配したが、エコーの長い音は好まない彼女の趣向に合っていたのは幸いだった。

休憩時間はピアニストと無邪気に卓球をしていても、一旦録音が始まると、ミキシング室にも伝わるほどの集中力でチャイコフスキーの「瞑想曲」を弾いていたのにはさすがに驚いた。特に枯れたような音色のppは、熟年の女性がハスキーにささやいているようで、人生の酸いも甘いも知り尽くしたようなその言葉にならない語りに、直に心を揺さぶられたような気がした。録音後のインタヴューでその感動をぶつけてみると「ppでは、技術面に捕われ、主観的にならないように気をつけていますので、そう言っていただけると嬉しいです」と答えてくれた。

ワックスマンの「カルメン幻想曲」では、自由奔放さが彼女の人格にピッタリ合っていたと感じられたが、セギディーリヤの部分では何度も何度も録り直していた。速いパッセージを音楽の塊として捉える彼女の音楽的姿勢は、録音して同じ部分を何度でも聴かれるという媒体には多少不利な面もあるだろう。繰り返すうちに、彼女の音楽的勢いがなくなってきた。

そんな心境を彼女はこう語った。「レコーディングで難しいのは、集中力とテンションを保つことです。また、どのパーツを使われるかわからないので、毎回全力投球するのが疲れます。音程など細かい部分は、レコーディング・ディレクターが十分注意してくれますが、それに気をつけて弾くと、勢いが失われる原因になります。自分としては乱暴くらいの勢いでやりたいのですが、何度も繰り返すと肉体的にも疲れます」

選曲の理由は、「クラシック・ファンでなくても取っつきやすい曲に、多少マニアックで、理解できないけれど面白いなと思ってもらえるような、シマノスキなどの曲をからめてみました。その中間くらいに位置するショーソンは、ピアノ伴奏の録音が少ないので取り上げることにしました」と話してくれた。

彼女の進歩を遠くから見ていたフエテル前学長も、「技術的には入学時から素晴らしかったが、人格的に成熟したので、それが演奏に反映されるのが楽しみ」と語っていた。スタート地点となるCDの完成が楽しみだ。

©三浦興一

3月16日から19日にかけてチューリヒで行われた録音セッションで。Sony BMG Masterworksと専属契約を結んだ神尾は、第一弾となるアルバム「PRIMO〈プリモ〉」を6月にリリース。[収録曲] シマノフスキ「神話ー3つの詩」、ワックスマン「《カルメン》幻想曲」、チャイコフスキー「ワルツ・スケルツォ」「瞑想曲」、ショーソン「詩曲」他〈共演〉ヴァディム・グラドコフ(p)

「Primo/神尾真由子デビュー」
〈曲目〉シマノフスキ「神話」、ワックスマン「《カルメン》幻想曲」、ショーソン「詩曲」〈演奏〉神尾真由子(vn)、ヴァディム・グラドコフ(p)[BJ BVCC-38492～93]
※DVD付初回限定盤